

境界性パーソナリティ障害の治療について 象徴的表現と splitting

木澤光子, 田中 香

家政学部生活科学科生活科学専攻

(2007年11月7日受理)

Treatment of Borderline Personality Disorder Symbolic Expression and Splitting

Department of Home and Life Sciences, Faculty of Home Economics,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501 - 2592)

KIZAWA Mitsuko and TANAKA Kaori

(Received November 7, 2007)

1. はじめに

境界性パーソナリティ障害 (BPD) の症状には、極端な認知すなわちベック (Beck) の言う二分法思考がある。好きか嫌いか、いい人が悪い人か、などの二極性の思考である。とりわけ際だつ思考のパターンに、良い人じゃなかったら悪い人であるという具合の減算思考であり、公式のように瞬時に認知が移行するところは、多くの臨床家が手こづるところであるが、興味深いところでもある。

最近の BPD の療法のうち、リネハン (Linehan) による弁証法的行動療法は、特に注目する療法である。弁証法的行動療法は家族療法、グループ療法の中で実行することができ、具体的なプログラムの実行により展開される。holding と splitting を組み合わせるといった特徴は、BPD 患者の激しいアクションからセラピスト自身を守る上でも、また BPD 患者を守る上でも有効であると述べている。

splitting は、もともとクライン (Klein, M, 1946) が、子どもの治療から精神分析の原始

的防衛規制として明らかにした概念であるが、BPD で言えば二分法的思考のことである。悪い自分から良い自分へ、不健康な考えから健康な考えへと移行する splitting が顕著であり、これに対しては巻き込まれないように警戒しなければいけないと多くの臨床家が述べるところである。しかし、splitting を技法としてみたとき、セラピストを良いセラピストと悪いセラピストと分けるように、BPD 患者の中において splitting を操作的に起こしネガティブアクションからポジティブアクションへの移行をスムーズにおこすことが可能ではないだろうか。

また、ガンダーソン (J. Gunderson) は BPD 患者に、「変化することを目的とした治療を受けている経過にあるという姿勢」をメッセージとして伝えていることを重視しており、BPD 患者に対し、セラピーのすべての場が非常に有益なものであると認識させることに成功している。

そこで、本研究の目的は、自経例を通して次のことについて検討し明らかにする。

日常生活の中で、治療であることをBPD患者に意識させることは非常に困難である。そこで、すでに効果の発表されている弁証法的行動療法の「姿勢」を、日常的な関わりの中で活用し、BPD患者へのより高い治療効果を目指すことはできないであろうか。Day Careにおける日常を、優れた治療場面にするための技法を検討する。

具体的には、日常的にセラピストと接触することの多いDay Careの臨床の場において、BPD患者との心理的境界を形成するための象徴的表現の効果について考察する。そして日常的に接しなければならぬBPD患者に対し、弁証法的行動療法の「splitting」を操作的に起こし、良い自分行動を認識する方法について検討する。

2. 自経例を通して

ケースの概要

Aは、20代の女性で、両親、祖父母、弟2人と同居している。最近、Aが最も家族の中で話をするのできる下の弟が、勤め先を5ヶ月で退職し他県に行ったまま居を構えて家に戻らなくなった。Aは家族と話すことはほとんどなく、特に父親に対して恐怖感・拒否感・嫌悪感をもち、父親との接触を中学生の頃から持たなくなっている。母親を「母親」と表現し、父親を「もう一人の人」と言う。

AはBPDであり、摂食障害、強迫神経症などを合併している。AはBPDであることを認識しており、妄想と不安に対して薬物療法を受けている。

食事に関して言えば、食品を見れば瞬時にカロリー・栄養価等が脳裏に浮かび、カロリーの多いものは無意識に避け、それを食べなければいけない場面になると腹痛や吐き気が起こる。セラピストと出会った頃にはすでに、家族と食事をしていなかった。

家族はAを支えられず、それぞれが問題を抱えている。Aは家族と会わないように家庭内で生活し、食事は夜中に米飯だけまたはお菓子を食べて空腹を満たしている。日中は、ほとんど空腹感を感じることはなく、夜中になるとおなかが空くと言う。

強迫神経症は、手洗い行動が中心である。外から部屋に入ってきたときに、2分～3分くらい石鹸を使い手を洗っている。

多くのBPD患者がそうであるように、Aも家族の支えを求めることを拒否している。家族療法家は家族の支持を得られないことが、後の精神療法の中断につながる大きな要因であると強調する。ただし、BPD患者自身が家族に経済的依存をしていたり、未成年の場合は、家族を対象にした治療が有効であると述べているのであって、必ずしも成人もしくは経済的に自立した患者をターゲットにしているのではない。

本ケースは成人女性であり、父親の扶養家族であるが、経済的自立については、セラピー開始後にアルバイトを始めることができ、経済的依存はほとんどない。そこで、家族療法を手法とせず、むしろ積極的に家族との関係を切り離れた。家族を客体化し、家族を依存対象とせず、セラピストの倫理観・行動を模倣するように伝えた。つまり、依存対象であるセラピストを成人モデルとするように指示して具体的な像を示し、成人モデルの行動と患者行動を比較し、望ましい行動とはどのようなものかを考えさせた。

Day Careにおける技法「象徴的表現」

拙論「境界例の主観的体験についての客観化 記録の効果」(2007)で述べたように、認知の誤りについて記録を用いて修正を行うことにより、視覚的に自分の行動の確認をすることができた。また、見通しを持つことがで

き、言葉のみの伝達によるものよりも効果が高まることを報告した。しかし、定着という面で言えば、日常的な繰り返しの確認が重要である。そこで「回路」という象徴的表現を用いて、定着して欲しい行動の修正を行った。

BPD の場合、二分法思考が特徴であるが、この特徴について次のような説明を行った。「Aは、思考が一極からもう一方の悪の極に瞬時に移行する。その「回路」しかない。それは良い考えをする極に回路がつながっていないことを意味する。だから新しい回路をつくらなければいけない」つまり、公式のように二分法思考が起こるという説明を行った。そこで新しく正しい「回路」形成をすることをAとセラピストで確認した。これによって日常的な回路づくり、すなわち正しい行動への変更を了解しやすくなった。

「回路」を使用する効果について、経過を追って次に述べる。

4月13日

「回路」を用い始めた頃は二分法思考で行動が起こったが、合い言葉のように『「回路」は?』と聞いたり、『「回路」を形成してください』など、回路の意義の確認を常に行った。また同時に記録をして確認作業を行った。

4月14日

「回路」を使用し始めた翌日には、図1のような記録が残されている。上方の丸で囲んだところは、Day Care の部屋の中で、他の利用者を意識しているAの頭の中と視線の解説である。「目を開けているだけで、後ろを見ている。だいたい目のついていない方を見ている(意識している)」と、もやもやの頭の中と、眼球が飛び出すほど、実際は見えない相手を凝視している感覚に襲われている様子が描かれている。

しかし、その左方に書かれている「回路つなげます 回路をつくります」に見られるように、主体的に思考の変化をしようという言葉が書かれている。

下方の丸で囲んだところは、Day Care の部屋の見取り図である。部屋に入ってきたとたん、丸内のような Day Care 利用者のいる風景が展開されており、特に右角二人は「敵」と表現されている。その理由は、この場面の前にAが居ないところで自分の悪口を言っていた(?)と確信していたからである。この敵と言う考えが頭の中から離れず、頭の中がもやもやもやになったと述べている。

しかし、下方に「回路をつくります よーく観察」と書かれ、自分の行動の変化を起こすために必要な行動が想起されている。

「回路」を使用することにより、思考の流れを矢印で示し、電線を通る電流のように視覚的に映像化されていることが認められ

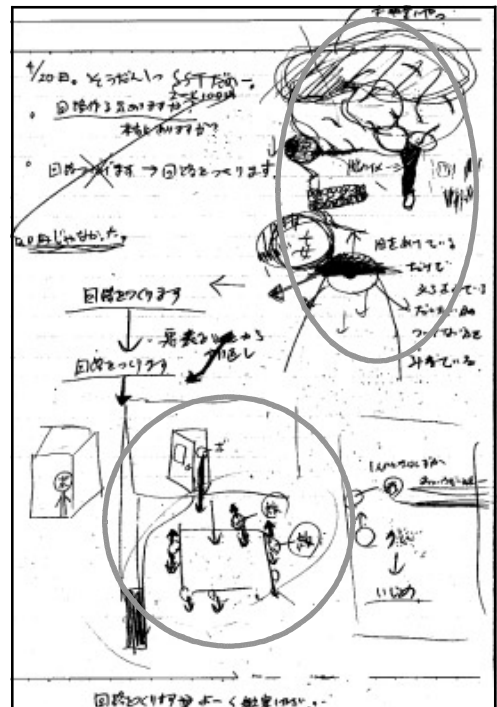


図1

る。日常的にはBPD患者に治療経過であることを認識させることは非常に難しいのであるが、象徴的な言葉 ここでは「回路」を用いることにより、意識化することができるようになったのではないだろうか。

5月10日

AがDay Careの部屋に入った時、たまたまBと目があった。その時のAの気分は『皆を殺してやる。特に目のあったウザイヤツ。つぶして殺してやれ。こいつは内蔵えぐり抜いて、半殺しでホルマリンに漬(浸)けにしてやる 妄想 回路をつくります。時計を見ていたときに目があっただけだった』である。丸に囲まれた女性が、まさに自分を睨んでいると感じられていることについて「回路」を作り、これは妄想であり、真実はAが時計を見たときにたまたま目があっただけと言うことを洞察した。

図2の丸に囲まれた絵は、セラピストが場所を移動したときに、書いたものである。この絵には解説が付いており、『(セラピストが) ~に移動したときに「(Aが)逃げた」と言った 回路をつくります ただとなりにな

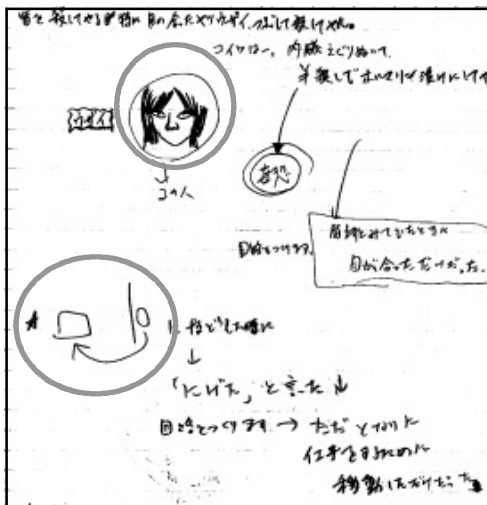


図2

事をするために移動しただけだった』と書かれている。誤った認知を正しい悪意のない認知に修正することができている。

「回路」形成を初めて1ヶ月後には、一人で新しい認知及び思考を発想することができるようになった。

5月16日

この日は、Day Careを沢山の人が利用していた。しかし、予想外の多い人数ではなく、いつもよりも1名~2名多いという程度である。その変化がBPD患者にとって大きな変化であり、自分を迫害するものとして感じられる。記録には「今日も微妙な日だった。部屋にめっちゃめっちゃ人がいたから、とてもうざかった。何というか、とにかくうざかった。でも、いらついて書いてると筆圧がかかってぐろいことが分かった。いつもどす黒くなっていることが分かった」と書かれ、人がいるとその気配に集中していることがわか

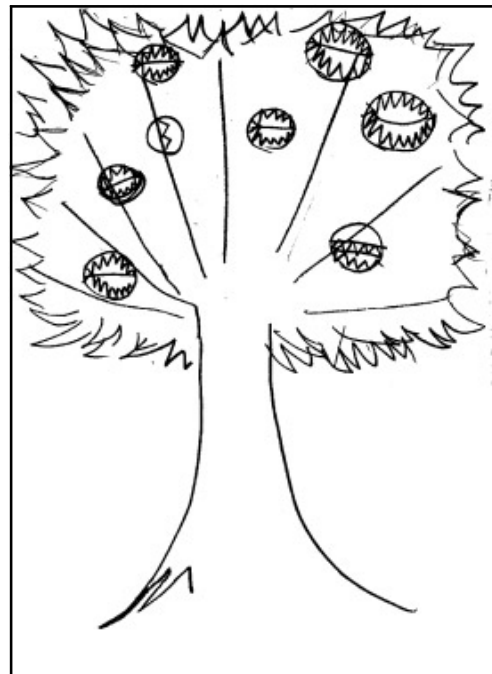


図3

る。この時に書いた絵が図3である。

Aはこの絵を心理診断に使うバウムテストだと知って書いている。また、診断方法も書籍を通して大まかに知っているが、特にとりつくろうでもなくありのままに書いている。BPDの特徴に、その時の感情に支配されているとき、その感情を放出しなければ気の済まない衝動性がある。そのため樹木を書くにあたってとりつくろうことをせず、自分の気分を表現したのである。

放射線状の枝をとげとげしい樹冠が包み、口の形態をした実を8つ書いた。樹幹は太くしっかりとしている。しかし根は左3分の1を書いているだけで、右部には根が無く自我の漏洩が感じられる。8つの口は、自分の悪口を言う他者の口であり、また敵を食べる食虫植物を表現している。他者の口であったり、相手を傷つける自分の口であったりと2つの意味を持たせ、自我同一性の障害があることが推察される。

この絵を書いてからAは「バウムテスト 樹木画による人格診断法」を確認し自己診断をしている。「診断を見たら、未発達・知的障害に一番似ていた」と書いているが、そう思っても特にダメージはない。

「回路」をこの日は確認しなかったが、バウムテストを自ら書くことによって、治療中であるということを認識していることが理解できる。

5月18日

Aは、久しぶりに朝から Day Care に参加してきた。しかしセラピストの机の上に、昨日敵意を持った利用者が配っていたお菓子を見つけ、いきなりげんこつでお菓子をつぶした。

Aはノートに「朝からあいつのお菓子をつぶして、激怒された。先生のお菓子がおい

てあったけだった 回路をつくります。人が皆敵に見える 妄想」と書いた。依存対象であり成長モデルでもあるセラピストとの間の境界が、激高のたびになくなることが繰り返された。しかし、そのたびにセラピストが「これはわたしのもの、あなたのものではない」と境界をつくるようにした。またその際に「境界を容易に飛び越えるのは、BPDの特徴であり、それはとてもいけないこと」という認識を繰り返し伝えた。「回路」形成とともに境界づくりを反復することで、行動の修正を図った。

図4「人の恨みは3日まで、ボーダーのように数年越しの恨みはボーダーが多い。普通の人では3日くらいまで。」と同じ日に書き、BPDの症状について書いている。BPDの傷つきやすさ、憎悪の反復と維持を自覚しているが、まずいことだと思っていない。このときAの中で起こっていたことは「ズーと前に、先生の机の前をぶんどり居座った女が2人来て、資料をパソコンから取り出し、資料を取



図4

り出す方法がわからなかった。バカがまたやってきた くしゃくしゃの私が、あほと言った。だって私より頭が悪い」しかし、実際はかつて敵意を感じた利用者ではなく、全く別人であった。以前に敵意を持った人と、目の前にいる人の容姿が全く違っているのに、敵意を感じた人間として直結させ確信を持っている。

この場面でも「回路」を作ることを指示し、Aが敵意を持った利用者とは異なることを伝えた。その結果「先生に相談をしに来ただけだった」という洞察を行うことができた。

BPDのDay Care治療においては、日常的な接触であるが故に、一貫しブレない態度が必要である。しかし、逆を言えば治療的關係で常に接することができるならば、高い治療効果につながりやすいとも考えられる。

不適切な行動の修正は、BPD患者に理解しやすいように表現することが必要である。「回路」「境界」という言葉を合い言葉のように使うことで、不適切な行動であったことに気づき、回路の見直しと修正を図った。また「回路」「境界」は、イメージを具体的に持ちやすい用語である。つまりBPD治療において、修正行動を的確に表した用語を頻繁に用いることで、治療中であるという認識を持たせ、患者とセラピストという関係を維持することができると思われた。

市橋秀夫(1991)は比喩の使用が治療に有効であることを強調し、その例として「カチカチボール」(アメリカンクラッカー)をあげている。BPD患者が、すぐにカチカチボールになりトラブルに巻き込まれているという比喩を用いて、BPD患者の自己理解をスムーズに進めている。

筆者の用いた「回路」「境界」は、象徴的な使用であるが、比喩と同じ効果を見いだすことができる。BPD患者は洞察の困難さが

あっても、象徴的表現は比較的容易に腑に落ちるようである。セラピストとBPD患者との間で了解されている「回路」「境界」という言葉によって、治療構造を呼び覚ますことができる技法である。

象徴的表現の頻用は、BPD患者との間のセラピスト-患者関係を維持させる効果を持ち、治療を目的とした生活であることを意識させることができる。また、情動理解や説得に近い説明を受け入れることの困難なBPD患者は、じっくり話すよりも直感的なイメージをもたらすような象徴的表現を用いて二極思考を活用することが効果的である。

技法「splitting」

BPD患者は、変化への柔軟な適応が困難であり、変化に対しパニック、特に見捨てられ不安を引き起こしやすい。変化をスムーズにかつ的確に受け入れるための技法として、splittingが有効である。このsplitting技法とは、関わり方の形態が変化することに注目させ、変化しなければならぬ行動をバックメッセージとして伝えるようにした。つまり一般的に使われるsplittingとは異なり、これまでの行動や情動との決別(分裂)を意味する。今回は呼び方を変えることによるsplittingについて述べる。

Aが、セラピストだけでなく、Day Care利用者との関係を持つと努力するようになり、時に限られたメンバーではあるが談笑の場面が見られるようになった矢先、セラピストが多忙となり、Aと関わりを持てなくなった。それに伴いAの行動が不安定になり、「回路」を指示する場面が頻発した。その時に書いた記録が図5である。図5のように骸骨を書き「カボチャしんじゃえー」とコメントを書いている。カボチャは、A自身であり、セラピストでもあり、またDay Care利用者で

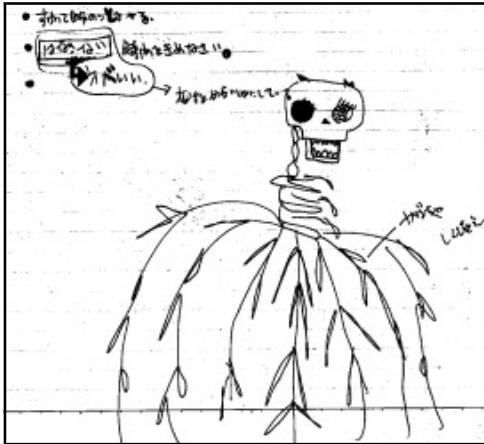


図5

もある。しかしこの頃のAは、衝動的行動が依然続いてはいたが、「回路」を形成することの重要性は十分に理解していると思われた。A自身、分かっているのに衝動性を抑制できない葛藤があることが「やろうと思っても、ちっともできないんだもん」と言う表現などに見られた。Aは他者への信頼、特にセラピストへの信頼が確立したこともあり、一時的な破壊行動を splitting の機会として捉えることにした。そこで、図5の骸骨は、A自身のことにも意味していることに注目し、Aに骸骨の意味について説明した。Aに「この骸骨はA自身ではないだろうか。ボーダーのAがいなくなり、A自身になろうとしている。だから今日から今までのようにボー（象徴的表現）と呼ばずにAさんと呼びます」と伝えた。

それを受けて記録に「ボーは死んだ。ボーはもう今日で死んだらしい。私になつたらしい。骸骨はボーだった。ボーに死んじゃえと言ったのだろうか。骸骨はボーらしい。ボーは今日で死んだらしい。ボーがどうすればよいかという方法も分かっているし、行動をすることも本当はできることをセラピストは知っている。できるらしいからボーは死んだ

らしい」と書いている。「……らしい」という表現に見られるように、変化に対する抵抗が伺われるが、自分の描いた絵の解釈について受け入れざるをえず、懸命に納得をしようとしている。

図6では上記の文章が書かれ、丸で囲んだカメレオンが「名前かえるって～。ボーは死んだって～」と背中あたりでうめき、口からは血を吐きながら「Heー えー いやー」と叫んでいる。変化はそのまま見捨てられる恐怖につながる。ここで慎重にしなければならないことは、決して見捨てるわけではないこと、成長したことを呼び方を変えることでより理解しやすくすることなど、変化の必然性について説明した。このフォローにより、パニックを最小限に抑え、新しい呼び方、すなわち新しいBPDでない自分になることを受け入れることが翌日に可能になった。

BPD患者は二分法思考であるがゆえに、だらだらと上がる坂道より一段一段上がる階段の方が、上がっていることが理解しやすい。

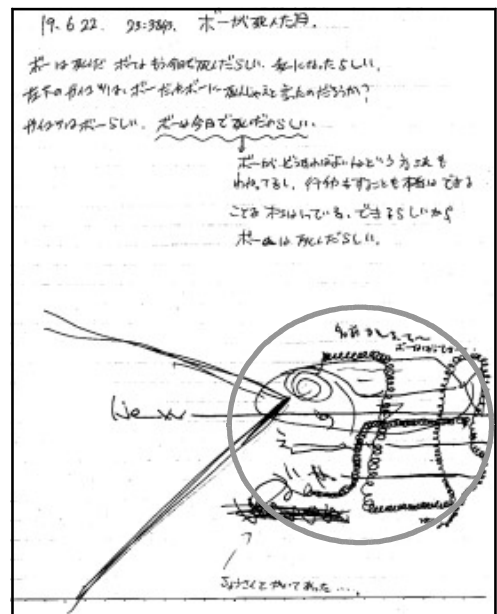


図6

上がっていなかったら下がっていると減算思考を起ししやすい坂道思考をしないことはベースとして重要である。そして1段上がったら1段上がったと感じる階段思考をするために、呼び方を変えて五感を刺激した。

象徴的表現にしても、splittingにしてもBPDの二分法思考すなわち極端な思考を活用したものであり、効果を認めることができた。

3. まとめ

BPD患者の衝動性、二分法思考の治療に早期効果をもたらす技法について検討することを目的として、Aのケースをもとに考察を行った。

その結果、象徴的表現「回路」「境界」用語の使用は、衝動的行動の抑制、二分法思考の修正に有効であった。この表現をすることにより、常に治療と向き合っていることを意識させることができることが明らかになった。

また、BPD患者は変化に弱い、変化をスムーズに行うために、患者の名前の呼び方を変える、つまりsplittingすることにより、

病態を自覚させることができた。ただし、変化はパニックを引き起こすため、変化の丁寧な解釈と見捨てられ不安へのフォローアップが同時に必要であることは言うまでもない。

なお、この報告は、A自身観察されている被験者であるということと、公開される資料として使用されることを承知しており、ホーンソン効果による成果が除外されていない。

また内容について、プライバシー保護のため、内容に誤りのない程度に脚色しています。最後になりましたが、Aさんには本研究に快くご協力いただき、感謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 市橋秀夫「境界人格障害の初期治療」精神科治療学 6(7) pp.789-800 1991
- 2) ジョン・G・ガンダーソン著 黒田章史訳「境界性パーソナリティ障害 クリニカル・ガイド」金剛出版 2006
- 3) 皆川邦直「プレエディバル心性と青年期」精神分析研究 30 pp.21-30 1986
- 4) 木澤光子 田中香「境界例の主観的体験についての客観化 記録の効果」岐阜女子大学紀要 第36号 pp.97-103 2007